
獵犬の歌

三宅 彰



幻冬舎文庫

獵犬の歌

獵犬の歌 目次

事件発生	9
捜査会議	17
聞き込み	25
第三の犠牲者	34
目撃者	39
銀鯨	48
ライブハウス	56
建築家	64
訪れた女	72
光る女	79
赤ら顔の男	87
ライブ	95
ライダー	104
現場検証	112

判明	120
べにばな	128
集合写真	136
天命	145
密行	153
秘密	161
二つの橋	170
スナップ	178
もう一人の女	186
夜の冷たさ	194
搜索	202
失踪	209
もう一人の捜査官	217
衝撃	226
立てこもり	241
街の灯	250

事件発生

冷たい雨が容赦なく、顔、身体に降りかかる。暗闇から訪れる風雨に逆らいながら、深瀬宏樹ふかせひろきは駆け続けた。革靴の底がコンクリートを打つ音が全身に響く。駆ける、もっと速く駆けると、心が叫んでいる。

高速道路に吹きすさぶ夜の風に身体が傾きそうだ。だが、駆け続ける肉体は外気の寒さを寄せつけない。新調したばかりのスプリングコートの内側に熱気がこもる。こいつを脱ぎ捨ててしまおうかと考えながら、なおも足を動かし続けた。今は一秒でも惜しい。「あの若造、今度行き会ったら、ただではおかんぞ」

胸の内でそう吐き捨てたとたん、若い警察官の顔が浮かんだ。高速道路交通警察隊、通称高速隊の隊員だ。その男は道路封鎖用のバリケードの前で仁王立ちしていた。

「進入が認められているのは緊急車両だけです」

「自分は捜査第一課第三係の巡查部長、深瀬宏樹だ。さっさと通せ」

「危険を回避するためです。隊長から指示のあった車両しか認められません」

「ふぎけるな。こんな手前で足止めされたらどうにもならんだろう」

「命令は命令です。通行は許可できません」

青ざめているものの、若い隊員の表情は引き締まっている。何があっても職務命令は遂行すると、眼が告げている。諦めるしかなかった。あんな手前で車を止められなければ、もう、現場に到着していたのにと、深瀬は唇を噛んだ。

ようやく現場が視界に入った。コンクリートの壁が茜色あかねに染められている。激突した車両が炎上しているのだ。突然、炎が高くなった。巨大な火柱から放たれた紅色の光が男たちの姿を映し出す。

燃え上がる炎の周囲を警察官、レスキュー隊、救急隊員らが慌ただしく動き回っている。ちくしように、遅かったと、吐き捨てた。首都高速三号渋谷線の一隅が、戦場さながらの様相を呈している。

「化学消防隊はまだか」

誰かがそう叫んでいる。背後から怒声が届いた。

「とまれ、来ちゃいかん」

警察官が両腕を高く掲げながら猛然と駆け寄ってくる。

「とまれ、とまるんだ」

「警視庁捜査一課巡査部長、深瀬宏樹」

そう怒声を放つと警察官が慌てて敬礼した。

「深瀬、ここだ」

今度は自分を呼ぶ声が聞こえた。道路の中央に停められたパトカーの傍らで佐久間久永^{なが}が右腕を振っている。パトカーに駆け寄ると同時に炎が勢いを増した。両腕で熱風を遮りながら佐久間に訊いた^き。

「車ごと壁に激突したんですね。野郎、丸焼けですか」

「間一髪でレスキュー隊が引きずり出した。いい仕事ぶりだった。だが、野郎は微妙だ。出血多量で死にかかっている」

「死んでくれてもいいが、その前にしゃべらせたいですね」

息も切れ切れにそう言うと、佐久間が顔をしかめた。

「死んでくれてもいいは余計だろう」

佐久間久永と組んでから半年が経つ。階級は警部補、今年四十七歳になる。仕事ができる刑事として評価は高い。だが、相棒としては今ひとつしっくりいかない。本音を隠されているように感じる時があるのだ。

佐久間が白いものが混じり始めた髪に手をやった。

「事件発生は午後十一時三十五分。現場は三軒茶屋だ。警察官が職務質問をしようとしたところ、いきなり発砲しやがった。それが一時間半前だ。撃たれた警察官はほぼ即死だった」

しばらく言葉がなかった。怒りが胸に沈殿していく。

「若かったのですか」

「そこまでは聞いていない」

佐久間が短く答えた。同僚が撃たれたのである。家族を失ったのにも等しい。憤りや憂鬱ゆううつが増してくる。

「警察官を撃った直後、野郎はタクシーを強奪した。その時、今度はバカでかいナイフを取り出したそうだ。撃つ直前、『騙だまされないぞ、殺してやる』『俺は一人じゃないんだぞ』と叫んでいたと、運転手は証言している」

「職質したのは偽警官だと思ひ込んでいたというわけか。それに『一人じゃない』っていうのはどういう意味なのか。共犯がいるってことか。大型ナイフとくればあのヤマに結びつきますね」

深瀬は右手でこめかみを強く押さえた。無残な死にざまをさらした男たちの姿が脳裏に浮かぶ。現在、捜査中の連続斬殺事件である。二名の被害者は鋭利な刃物で咽頭部いんとうぶを

右から左に切り裂かれていた。そればかりではない。被疑者は被害者の顔面を切り刻んでいた。

佐久間が続けた。

「野郎は三軒茶屋インターから三号線に入り、逃走しようとした。その時点で百五十キロ以上出していたようだ。高速隊の白バイに追跡されてさらに速度を上げた。それで最後はああなった」

佐久間と一緒に炎を見上げた。紅色の柱が夜のビル街を照らしている。鎖から解放された凶暴な獣が、無防備な街に赤い舌を這わせようとしているかのようだ。それを眼前にしなから何もできない。

深瀬は佐久間に訊ねた。

「どんな野郎なんです」

「性別は男。年齢は四十代から五十代。分かっているのはそれくらいだ」

深瀬は雨で重くなった前髪をかき上げた。

「野郎が斬殺事件の犯人だったら次の殺しはありませんね」

佐久間がうなずく。

「そういうことになるな。だが、このまま死なれたらすつきりはしない。なぜ、あんな

殺しをやらかしたのか、分ならずじまいではな」

だからどうしても死なせたたくない、死なせてはならないだと、深瀬は思った。

「とにかく、今は野郎があゝの世に直行しないように祈るしかない」

その言葉に渋々うなずいた。おい、もたもたするな、早くしろと叫ぶ消防隊長の怒声が聞こえた。背中にボンベを背負った隊員らが燃え盛る炎へと向かっていく。セドリツクが滑るようにバリケードの内側に入ってきた。

覆面パトカーから現れたのは田崎信也たざきしんやと津本俊介つもとしゆんすけだった。

「やつと若殿たちのお出ました」

普段、冗談や無駄口を叩かない佐久間が珍しくそんな言い方をした。陰いんにこもっているわけではない。冷たいというのでもない。だが、本心をさらさない。それ故によそよそしさを覚えてしまう。妻が長期入院をしていると誰かが噂していた。それが事実かどうかは分からない。

「お前たちは車で登場か」

強い口調でそう訊ねると、津本が怪訝けげんな表情になった。

「先輩はどうしたんですか」

「手前で止められたから、ここまで走ってきたんだ」

津本と田崎が顔を見合わせる。

「あの若造、俺だけ走らせやがって。ぶっ飛ばしてやる」
今度は田崎が口を開いた。

「誰ですか、あの若造って」

「お前には関係ない。余計なことを聞くな」

田崎が角刈りにしている頭をかいた。

「第二陣の到着だ」

佐久間がバリケードの方に視線を向けた。セドリツクの右側にシーマが停まった。ドアが開くと同時に太い声が響いた。

「どうなっているんだ。報告しろ」

係長の有働輝政である。その後ろにいるのは舟見友明、長谷川一郎、浅江則夫である。全員沈痛な面持ちだ。銃撃された警察官が死亡した事実が刑事たちの心を暗くしている。有働が髪の薄くなった頭に手をやった。

精悍な顔に当たった雨粒が無数の滴となり、絶え間なく滑り落ちていく。有働輝政、五十二歳、柔道六段、空手四段の猛者である。武闘派らしく決断が速く、猪突猛进する男である。烈火のごとく怒る時、顔が見事に朱に染まる。捜査一課では「赤のてる」と

呼ばれている。

「野郎は救急車で東条病院に搬送されました。危篤です」

佐久間がそう言うと、有働がわずかに首を縦に動かした。

「いまましい野郎だが死なせてはならん。あの二件も奴がやったのなら、絶対に罪を償わせてやる」

続いて主任の舟見が口を開いた。

「拳銃とナイフは回収できたのか」

「確認が取れていません」

「あれじゃあ、厳しいか」

舟見がコンクリートの壁へ視線を向けた。いくらか高さは下がったものの、赤い炎は立ち続けている。

「もっと近づける、それでは消せんぞ」

大型ボンベを運ぶ四名の隊員に再び隊長の怒声が響く。最後の力を振り絞りつつ、赤々とした炎がビルの群れを照らし出す。

「分かっているな。これは弔い合戦だ。絶対にお宮入りにするな」

有働の声を聞きつけたかのごとく、火柱が夜空に牙を剥いた。

捜査会議

翌日の四月四日午前九時、本庁三階にある第三〇六会議室にて、「都内連続斬殺事件捜査連絡会議」が開かれた。

「深瀬、一番最後にお出ましか。さすがだな」

深瀬が名札の置かれた席についたとたん、舟見友明が皮肉を口にした。平面的な顔だちと上にこびへつらう態度から、ヒラメとあだ名されている男だ。三係の中で最も波長が合わず、時折、大喧嘩げんかをやらかす。

「自分は遅刻してはいません」

「仰せのとおりだ。まだ三分もあるからな」

舟見がにやりと笑った。正面にいる三人の男と一人の女が刑事二人のやり取りを観察している。四名は昨年、警視庁に設置された捜査支援分析センター・捜査支援部門所属の犯罪心理分析官である。

捜査第一課第二係、第三係の捜査員十六名と心理分析官四名が顔を合わせるのは今日

で三回目だ。特捜本部が開く捜査会議は第二係、第三係に所轄の捜査員が加わり、かなりの人数になる。

斬殺事件が猟奇的であるが故に、参加人数が多くなればなるほどさまざまな意見が出され、收拾がつかなくなる恐れがある。特捜本部の捜査会議を円滑に進めるために、支援センターの分析官と警視庁の捜査員が事前に意見交換をしている。

第二係で主任を務める佐伯仁さえきひとしが口を開いた。

「それでは会議を始めます。最初に昨日の件について舟見主任から報告があります」

佐伯は教師のごとく丁寧な話し方をする。また頭の回転が速いために佐伯が司会を担当する会議は滑らかに進行する。

「それでは報告します。事件の経緯は資料にあるとおりです。その後の経過ですが、救出された男は東条病院に搬送されました。現在、集中治療室で治療を受けていますが、容体は未だに不安定で予断を許しません」

舟見が続けた。

「現時点で判明しているのは性別は男、年齢は四十代から五十代後半と思われる。所持品が焼失しており、氏名、職業等は確認できません。所持していた拳銃、サバイバルナイフの分析を進めています。この線から身元がたどれるかもしれません」

「名無しでは呼びづらいから、しばらくは炎上男でいく。職務質問しようとした警察官にいきなり発砲したのだから、凶悪犯だ。さらに大型ナイフとくればこちらの事件との関わりを検討しなければならぬ。そのような経過から、我々も今後、炎上男の情報を共有していく。少しでも供述が取れば助かるんだが」

有働が報告書の上に手を置いた。表紙には「都内連続斬殺事件概要」と記されている。「とりあえず炎上男の件はこれまでとして、会議を進めよう」
捜査員らが資料に視線を落とした。

一 被害者氏名等

小村逸夫 こむらいつお 男 昭和三十六年一月七日生 四十九歳 配偶者無

現住所 文京区小日向四一—三

本籍 栃木県鹿沼市千渡四四—三三

職業 自動車整備工

状況

平成二十二年二月三日（水）午後八時二十分頃、二日間無断欠勤したことを不審に思った同僚が、現住所宅（借家）を訪ねたところ同人を発見。

咽頭部を鋭利な刃物で右から左へほぼ水平に切開されていた。死亡

後約五十時間が経過していた模様。(解剖報告参照)

二 被害者氏名等

松波義雄^{まつなみよしお} 男 昭和三十年三月九日生 五十四歳 配偶者無

現住所 練馬区春日七一二二 秋輪アパート五号室

本籍 和歌山県紀の川市深田二八五四

職業 宅配従業員(パート)

状況 三月三日(水)午後七時五十分頃、共益費を集金にきた管理人が五号室にて、同人を発見。

殺害の方法は右記被害者と同一。死亡後約三十時間が経過していた模様。(解剖報告参照)

三 特記事項

二名の被害者は死後、顔面を鋭利な刃物で切り刻まれている。額を右から左に横一線、同様に右眼から左眼へかけて横一線、さらに右眉頭付近から左頬への直線、同じように左眉頭付近から右頬への直線、計四本の切り傷が認められる。